

# 『晨报』における学生運動に関する言論

—1919年五四運動から1928年北伐まで—

武 曉 桐

## 要 旨

本稿は民国初期に北京で発行された日刊紙『晨报』の研究の一環として、その学生運動に関する言論に着目するものである。従来の先行研究では『晨报』の学生運動に関する言論は五四運動時期に偏り、全体的な考察が行われていなかった。本稿では、まず『晨报』と学生との関係を分析し、1920年代において『晨报』が「教育界の機関紙」と認識されたことを確認した。その上で、『晨报』の五四運動（1919年）から北伐（1928年）までの学生運動に関する言論を分析し、学生運動の発展につれ『晨报』が学生と政治の関係に対する認識を変化させていったことを、『晨报』の学生運動に対する言論の変遷から明らかにした。

【キーワード：『晨报』／学生運動／民国初期／新聞報道】

## はじめに

本稿は、民国初期に北京で発行された日刊紙『晨报』の研究の一環として、『晨报』の学生運動に対する認識について分析を試みるものである。

これまでの研究で明らかにされたように、辛亥革命の結果として「言論の自由」が芽生え、近代中国のメディアは、民国初期（1912-1928年）に一つの重要な転換期を迎えた。『晨报』は、まさにこのような時代に創刊された。1万の発行部数を持つ『晨报』は（民国初期の北京では、5000～6000部でも「大新聞」に属した）、その編集の水準の高さ等においても、後に「新聞界の新紀元<sup>1</sup>」と評価される存在であった<sup>2</sup>。

また、『晨报』が学生と濃密な関係を有したことは、多くの史料や回想文から伺うことができる。例えば、『益世報』（『晨报』と同時代に刊行されていた新聞）のある記事からは、「連日、中国商学各界において山東問題による激しい「日貨排斥」運動が繰り広げられていた。五月二日の北京『晨报』を調べると外交問題についての記事が載せられたようで、今回の風潮は恐らくこの報道と関係がある<sup>3</sup>」と、五四運動に対する『晨报』の影響力の大きさを読み取ることが可能である。また、日本外務省の史料には、『晨报』が「極力少年学生ト連絡ヲ保<sup>4</sup>」という指摘が存在する<sup>5</sup>。

しかし、従来『晨报』に関する先行研究は少なく、本紙の編集方針や政治的立場など多くの点が不明なままである。また、『晨报』と学生運動の关系到言及した研究は、五四運動期に考察が偏り、それ以降の時期は等閑視されてきた。筆者はこのような窮状を打開すべく、『晨报』研究に取り組むものであるが、特に本稿では学生運動に対する『晨报』の言論、及びその変遷に注視することで、本紙の政治的性格の一端を解明しようとするものである。

先行研究において、まず、『晨报』が学生運動に対する果たした役割が積極的だと評価したものが挙げられる。原正人氏の研究<sup>6</sup>では、『晨报』が研究系<sup>7</sup>の機関紙としての角度から、『晨报』が積極的な学生の言論の場となり五四運動の一翼を担っていた状況を指摘した<sup>8</sup>。また邵建氏の研究<sup>9</sup>では、『晨报』の編集者の活動が『晨报』の紙面に限らず、個人の行動においても五四運動において学生を支持したことを指摘した<sup>10</sup>。その他、五四運動における『晨报』の積極的な影響についての研究は複数ある<sup>11</sup>。

しかし、学生運動に対する『晨报』の消極性を指摘した研究もある。例えば、呂芳上氏の研究が挙げられる<sup>12</sup>。この研究では、1919年五四運動から1929年北伐の翌年までの学生運動と政治運動との関係を取り上げ、『晨报』をはじめとする当時の新聞を活用しながら、この時期の学生運動を国民党と共産党の政治運動の一部として読み取った<sup>13</sup>。その中で、1919年五四運動の『晨报』の記事のみに言及しながら「学生運動に好感を抱かない<sup>14</sup>」と『晨报』が学生運動には消極的だと評価した。

以上概観してきた先行研究は、いずれも学生運動に対する『晨报』の態度を断片的に言及したものと見える。『晨报』が学生運動に「消極的」とする立場にせよ、「積極的」とする立場にせよ、先行研究のほとんどは五四運動時期にとどまり、この時期における新文化宣伝の役割だけで『晨报』の言論を判断する傾向がみられるのである。

このように、1916年から1928年まで存在していた『晨报』が五四運動時期及びそれ以降の時期において学生運動にどのような態度を示したか、五四運動時期と比較していかなる変化があるのか、こういった言論の変遷をめぐる考察が先行研究に於いて不足している点であると筆者は考えるのである。

## 一、『晨报』と学生の関係

### 1. 『晨报』の紙面と学生

『晨报』は1916年創刊から1928年廃刊まで、幾度も紙面の改革を行い、各領域の記事をより豊かにするために、「晨报副刊」、「経済界」、「北京ニュース」などの紙面を増やした。特にその文化ニュースを重視する姿勢は、『晨报』の特色として一貫していた。

表1は戈公振の『中国報学史』において、各地の代表的新聞として1924年の北京『晨报』、天津『益世報』、上海『申報』、漢口『漢口中西報』、広州『七十二行商報』を取り上げ、ニュースの種類別により統計したものである。

この表から分かるように、各地域の代表的な新聞紙の中で、『晨报』の文化ニュースの割合は突出していた。具体的には、他の四つの新聞紙の文化ニュースがそれぞれ7.1%、6.2%、3.5%、12.3%に留まるのに対し、『晨报』は全体の20.4%を占めた。

その文化ニュースの具体的な内容は、学生の社会活動から学校生活にまで渡った。例えば、定期的に掲載された「平民教育」のコラムでは、平民教育において中心的な役割を果たした学生の活動を取り上げ、その内容・様子を報道し、また「運動会」のコラムには学生が行った運動大会の成績や状況も随時報じられていた。

〔表1〕文化ニュースと全ニュース面積の割合

	上海申報		北京晨報		天津益世報		漢口中西報		廣州七十二行商報	
	inch	%	inch	%	inch	%	inch	%	inch	%
ニュース全面積	1825	100	949	100	955	100	1197	100	1277	100
政治ニュース	422	23.1	339	35.7	576	60.3	572	47.8	305	23.9
経済ニュース	586	32.1	120	12.6	101	10.5	213	17.8	204	15.9
文化ニュース	130	7.1	194	20.4	60	6.2	43	3.5	157	12.3

戈公振『中国報学史』（太平書局、1964年）205頁参照、筆者作成

そして、ニュースの内容に限らず、広告にも『晨报』と学生の繋がりがうかがえる。

〔表2〕広告各部門面積と全面積の割合

	上海申報		北京晨報		天津益世報		漢口中西報		廣州七十二行商報	
	inch	%	inch	%	inch	%	inch	%	inch	%
商務	1790	51.17	729	57.94	2539	84.18	1667	79.04	1190	70.25
社会	1295	37.02	299	23.75	359	11.90	273	12.94	326	19.83
文化	324	6.41	163	12.96	80	2.64	46	2.18	109	6.43
交通	115	3.28	29	2.31	12	0.30	7	0.33	15	0.89

戈公振『中国報学史』（太平書局、1964年）207頁参照、筆者作成

表2の中で示した「文化」に関する広告は、教育と書籍の広告を指している。ここで分かるように、『晨报』の広告の中にも文化系の広告が一番多く、12.96%を占めた。特に学生募集の7、8月の頃、新聞第1面の広告はほとんど学生募集広告に埋められ、『晨报』の学生への宣伝効果が期待されていると伺える。国立北京大学の募集広告では、「募集要項は、北京では毎週月曜の『晨报』、上海では日曜の『時事新報』、月曜の『申報』を参照してください<sup>15</sup>」とあり、『晨报』の北京の教育界での位置を示している。

また、教育と書籍の広告だけではなく、他のジャンルの広告の中でも学生に対する呼びかけがある。

#### 映画広告

「本日の新聞には、北京の読者に新明劇場のチラシを添付する。制服を着てバッジを付けた学生全員は半額。」<sup>16</sup>（中国語原文の日本語訳は引用者による。以下同）

「平安映画會社からのお知らせ、学生注意、毎週土日午後三時、追加公演して学生を優遇する。制服を着てバッジをつけている学生が入場料五角となる。」<sup>17</sup>

「東長安街の平安劇院、今日上映するインドの映画は科学の面でも芸術の面でもかなり価値のあるものである。（中略）北京の教育界は映画の教育的役割に注目させるため（中略）北京の教育界のために特別上演する。入場料は二角、学生団体はもっとお得である。今日の午前11時にはじまり、

各学校にもお知らせしたので、ぜひ来てください。」<sup>18</sup>

### 銀行広告

「学生諸君は国内の大学或いは国外の大学に進学するために、学費を準備しなければならないのだ。(中略)一年の費用を貯金すれば三年間の準備ができ、まさに学費を節約する最良の方法。」<sup>19</sup>

### 写真館広告

「地方からの受験生へ、本館は各学校の要求した写真を熟練・精巧・素早くに完成できる。試験期間、急いで写真を使う方がたくさんいる。本館は学生のために短時間に仕上げて遅れないことが保証できる。」<sup>20</sup>

上の広告は映画、銀行、写真館など文化広告には属さないが、これらの広告主や広告業者が『晨报』の広告の中に取り込もうとした消費者は学生であり、『晨报』が多くの学生読者を抱えていた状況が窺えるのではないだろうか。

また、ニュースと広告の量以外にも、『晨报』は購読の面でも学生を優遇した。例えば、1922年4月26日の『晨报』には

前日、本紙の告示では、『晨报』が値上げした後、学生を優遇する方法が載せられた。それ以来、購読料九角でも貧寒の学生としては大変窮屈と感じ、学校の判子と一ヶ月以上の購読料を前払いするという手続きも多少面倒を感じるといった手紙が多数寄せられてきた。本社は一貫して学生を優遇するため、今回再び購読方法を変更する。北京市内の直接購読する学生に対して2割引を実施する。他に、特別券を作って告示の右に載せ、購読したい方々がこちらの券を切り取り、記入した後、弊社まで郵送するように。5月1日から、本社から直接発送する。皆さんにお手数をかけないように、購読料は新聞配達員が本社の領収書を持って集金する。学生愛読者のみなさまはどうか注意されたい。<sup>21</sup>

とある。こうして、紙面の内容から購読方法の面まで、『晨报』は学生読者に力を入れたのである。

## 2. 『晨报』の学生界における位置

上述したように、『晨报』の紙面では文化に関する内容が豊富で、学生向けの内容も多かった。このように『晨报』は学生グループの中で人気を得た。1923年における北京大学の学生に対する調査の中で『晨报』が人気一位と評価され<sup>22</sup>、20年代から『大公報』に勤めた徐鏞成が「私が師範大学に入った1927年の時点では北京の新聞の中で『晨报』が最も発行部数が多く、発行範囲が広い新聞であった。朝の師範大学の閲覧室で皆先を争って『晨报』を読んでいた。<sup>23</sup>」と回想していた。

特に『晨报』1922年9月17日の社説では

北京の『晨报』は教育界の機関紙、その理由は「『晨报』がいつも教育界を支援して教育界の味方をするからだ。」確かにこういう人がいる。そして、教育界の人々も大体こういう考

え方を持っている。なので、教育界に何か風潮があるたびに、本新聞に寄せてきた教育界のニュースは非常に多いのだ。<sup>24</sup>

とあり、『晨报』の文化に対する深い関心は教育界の人々の信頼を集め、1920年代には「教育界の機関紙」と認識され、「中国学生の指導者<sup>25</sup>」とまで期待されていた。

## 二、『晨报』の学生運動に対する言論

ここまで考察してきた通り、『晨报』は当時の北京の新聞の中で、文化的内容が豊富で、教育界からの投稿も多く、学生の中では高く評価されていた。では、『晨报』は具体的に学生運動をどのように論じたのだろうか。

### 1. 1919年五四運動時期の『晨报』の言論

近代学生の登場は中国社会に大きな影響を及ぼした。民国初期にはある程度言論の自由が確立され、メディアの活性化が急速に進展し、学生が新しいメディアから新思想と新文学を吸収し、また新思想と新文学の発展の新たな担い手となった。そこで、1919年、五四運動は、学生が中心となって反帝国・反封建を呼号し、民主と科学を旗印とし、欧米の近代思想を以って、封建的な倫理道徳や迷信を攻撃する運動として出発した。

五四運動時期の『晨报』も同じ態度を示した。1919年、パリ講和会議で山東省の旧ドイツ権益が日本に渡されたことをきっかけに、北京の学生が反帝国主義、反軍閥の運動に立ち上がったが、他の各界は形勢を伺い、学生運動の目的を疑った。これに対して『晨报』は学生活動の各方面の記事を詳細に載せ<sup>26</sup>、「国民が立ち上がり、政府を支援して、国家の面目を保つのが一般国民の義務と言える。だが我が国の国民は学生以外に、発言する人が全くいない。<sup>27</sup>」「毎日駆け回り、努力しているのはこれら青年学生だけだ。<sup>28</sup>」と学生の政治活動を評価した。そして、学生と政治の問題においては

ある新聞が学生を裁判に引き渡すべきだと主張した理由は、三つしかない（1）放火して人を傷つけるのは裁判を受けるのが当然である。（2）司法権の独立には干渉してはいけない。（3）学生は学業に専念すべき、政治に干渉すべきではない。（中略）そもそも学生が政治に干渉すべきではなくとも、国家を捨てる訳にはいかない。領土が取られ、売られるのをただ見て、他人に奴隷のように扱われる所で学問を求めるのは何の役に立つと言うのだろうか。<sup>29</sup>

と社説で述べた。

1919年五四運動の最中に載せられたこれらの社説からみると、学生の政治運動に対し、学問より国家が大事で、学生と政治運動とは切り離せないという『晨报』の態度が看取れる。

この態度はその後も続いたのであろうか。次節では1920年代に入った後、『晨报』が学生政治運

動に対する態度がどのように変化したかを考察する。

## 2. 五四運動期の後

五四運動を機に、一般民衆の政治参加が制度的に保障するようになった<sup>30</sup>。そして五四運動の後には、この民衆の力が革命政党と連帯し、組織された勢力として成長した<sup>31</sup>。この時期においては、学生が「学校自治」「試験廃止」「校長拒否」など学校内の運動を起こしたと同時に、全国学連の組織や北京政府への反対運動など、社会の風潮とも強く関連した。

しかし、このような風潮に先立ち、『晨报』は五四運動一周年の1920年に「学生たちの精神はもちろん尊敬するが、行動はいささか熟慮が欠けていると言わざるをえない。(中略)ストライキの後、学生が自分の望む条件を手に入れられるのかについて、我々は少し疑問を持っている。<sup>32</sup>」とすでに学生運動に疑問を投げ始めた。

そして1921年12月1日の『晨报』には以下の投稿が掲載された。

この二～三年、社会における学生の地位がだんだん高くなったようだ。彼らはよくも社会の監督者、評者、指導者を自任したものだ。世論の面も、ひたすら学生の行動に追従する。(中略)学生と親しい新聞紙が時代の渦から飛び出し、冷静に、切実に工夫して(一)監督者の監督者(二)評者の評者(三)指導者の指導者になってほしい。これは私が将来の『晨报』に対する持つ理想像である。<sup>33</sup>

学生運動の成長期とはいえ、実際には「教育界の風潮、一か月の平和もないくらい<sup>34</sup>」收拾がつかない状況に突入した中、五四運動成果の肯定することよりも、学生運動の行き先への懸念を示すことを重視した『晨报』の態度がここから分かる。

## 3. 1920年代半ば『晨报』に於ける言論の変化

先行研究でも指摘されたように、「学生運動の影響力は武力以上である。学生の力を掴めば、成功は必然となろう。<sup>35</sup>」と五四運動以後、各党派が学生を通して世論の形成を図ろうとした。その一例として国民党が1910年後半から20年半ばにかけて、学生への勢力拡大を図り、北京政権を動揺させるため、学生運動を支援する方針を取っていたことが挙げられる。そして、国民党の言論機関『民国日報』はその方針を受け、積極的に学生運動を支援する報道を続け、時には学生運動を煽るような記事を書いた<sup>36</sup>。

このような状況に対して、この時期の『晨报』には学生と政治の関係に関する社論が多く紙面を占めた。特に1925年の1月14日、15日、16日と3日に渡り連載した学生と政治の関係についての討論が注目される。

学生と政治、この重大な問題に対して、以前から意見を述べたいと思っていた。(中略) 共産派の議案では「全国の労働組合を、すでに我が党が占領したが、各地の学生会にもメンバーを送り込み、学生界を完全に我が党が利用できるように期待している」という条目がある。この決議は、共産派が赤裸々に学生総会を操縦し、学生を完全に利用したいとの宣言である。

国民党はこの条目に関しては、去年の秋に非難の意を表した。今回、北京での会議で挙げた共産派の罪状のなかでもこの条目を入れた。この行動から国民党は学生を利用するのが正しいこととは思っていないものの、実際のところ、近年国民党のリーダーは中学校に潜入して、演説を行い、学生に学業を放棄させて政治運動を煽っている。近來京津の各学校で、このような情報をよく耳にする。学校内部の問題は討論の範囲外だが、ここで問いたいのは、党人が学生を利用することが許されることなのだろうか、もし許されるならば、その条件はなんであろうかということである。もちろん、政党の存在を承認する限り、政党が民衆に宣伝することは否定できない。

学生と政治を接触させることが、一定の条件、一定の程度では完全に禁止することは必要ではない。ここで注意すべきなのは、宣伝には制限があることで、この制限を超えてはいけないことだ。第一にお互いの人格を尊重すること。第二に教育の威厳を尊重すること。党人が学生の人格を尊重した上で、学校の威厳を尊重しなければならない。例えば、学校内部のことに党人が手を出すべきではない。今回南開大学事件では、共産派国民党は学校内の紛争を利用して、学生を煽って、紛争を起こした。これは政治道徳を守ってないこととなる。<sup>37</sup>

この社説は『晨报』の学生と政治の関係の態度を最も明確に表現したものだと思われる。『晨报』は学生が国民の一部として、それに、教育がまだ普及してない国での知識界の有力な一部として、政党の宣伝対象になるのも当然なこと、と理解を示した。しかし、「ここで注意すべきなのは、宣伝には制限があり、この制限を超えてはいけないことだ。」「共産派国民党は学校内の紛争を利用して、学生を煽って、紛争を起こした。これは政治道徳を守ってない」と学生と政治を接触させるには一定の条件、一定の制限が必要であり、党派が学園内の紛争を利用して、学生ストを煽るのは政治道徳に反する行為であると強く主張した。

もちろん当時、このような観点を主張したのは『晨报』だけではない。1925年9月に胡適は「愛国運動与求学<sup>38</sup>」を発表し、その中で彼は北京大学の学生たちが当時の教育総長章士釗反対闘争に参加していなかったことを評価した。また彼は、学生たちは学校という環境と設備を活用して自分自身を有用な人材にすべく鍛錬せよ<sup>39</sup>と訴えた。さらに、当時の北京大学の教授は「本校は早く一般の政治紛争や学校紛争から離脱し、努力して学問の道を歩み、国家の一学術機関とならなければならない」、「本校の構成員で学校外での活動をする者は、各個人の名義で活動し、学校に影響を及ぼすことのないようにしなければならない。<sup>40</sup>」と宣言をしたように、当時、学校側や知識人たちも学生が学問に集中すべきだと考え、学生運動を決して支持しなかったのである。

しかし、1925年11月29日段祺瑞政府への抗議デモが行われたその後、国民大会の名で集まった団

体が晨報社を燃やすという事件が起こった。この事件は真相が分からぬまま収束したが、国民党と共産派が放火した可能性が大きい<sup>41</sup>と言われ、陳独秀もこの事件に関して「『晨報』が燃やされたのは当たり前ではないか？<sup>42</sup>」と胡適宛の手紙にその態度を示した。つまり、『晨報』の学生運動と共産主義に対する言論は、多くの政治勢力に対して大きな影響力を有していたと考えられる。

#### 4. 1928年北伐の直前

1928年、社会状況が不安定ななか、学生運動は暴走をはじめ。四川省立第一中学校の校長が、学校に不満を持つ学生に殴り殺され、手足を結ばれたまま、井戸に投げ入れられた。この惨事により、教育局長と他の学校の校長が驚き、全員辞職を申し出た。『晨報』には4日間連続でトップページに事件に関する社説が載せられ、「この事件は目下、中国の学校の風紀を明確に表わしており、中国の教育の悲惨な運命を示していると我々は思う<sup>43</sup>」と中国の学生と教育のゆく先を懸念し、

この十年間、学風が日一日と暴力的になり、学生運動は数えきれない。その悲しさ、恐ろしさは、年とともに増え、日に日に増加していく。これは、すでに全社会で公認した事実なので、余計な口はきかなくて良い。この状況に至った学生側の原因は三つある。第一、旧道徳観念は破壊され、新道徳の基礎は未だに成立していない。第二、学問に対する興味が無い、決意が足りない。第三、学校が何のために存在するものか、学生がどのような存在かを忘れたことである。<sup>44</sup>

と学生・学問・学校の意味を厳しく糾弾している。事件自体の討論が終わった後、『晨報』は更に2、3回に渡り、政府の学校に対する責任、学校の学生に対する責任、学校の組織などの面で大学教育がいかに充実していくべきか<sup>45</sup>などに関する問題を詳細に論じたのである。

さらに、1928年北伐軍の北京占領直前の4月に国民党と共産党の学校を干渉する行為に、『晨報』は、学生運動を煽る政党を、以下の様により一層厳しく批判した。

共産党は学生界の病気を一目で見通し、遠慮せず学校に潜り込み、学校を拠点に占拠し、学生を道具扱いした。利を以て学生の心を動かす、それで手当と公費があり；欲を以て、学生を誘惑、それで潔白を打倒、恥を一掃することがあり；偽善的なスローガンで学生を惑わす、無理性反科学の標語が存在し；学生の軽率な破壊行動が煽てられ、数えきれないストと悲劇が現れた。知識階級を打倒する標語で学生の退学に迎合し、道徳の網を突破する言い訳で学生の欲を掻き立てる。<sup>46</sup>

ここで、『晨報』の観点と、前述した北京大学教授陣の観点と比較してみると、両者の共通性がわかる。つまり、国家富強のための有力な手段である「教育救国」あるいは政党の学生利用という政治的な観念と異なり、『晨報』は学問を大事にする大学側の要求する学生像に傾いたことが分か



るのである。

## おわりに

本稿では民国初期到北京で発行された日刊紙『晨报』の研究の一環として、『晨报』の学生運動に対する認識とその変遷について分析を試みた。

先行研究は、五四運動時期に考察が偏り、この時期における新文化宣伝の役割のみに基づき、『晨报』の言論を判断する傾向がみられた。換言すれば、五四運動時期以降における学生運動への態度や、その態度の変化などがまったく考察されてこなかったのである。

こうした状況に鑑み、本論はまず『晨报』の紙面を分析し、『晨报』の学生界における位置を考察した。その結果、『晨报』がその紙面において文化ニュースを重視し、購読方法等の面でも学生読者に力を入れ、1920年代から学生の間で人気を得て、「教育界の機関誌」と呼ばれるようになったことを明らかにした。

そして、学生の言論活動が躍進した1919年から、1928年の北伐軍の北京占領に伴う『晨报』の停刊までの（『晨报』の学生運動に対する）言論を取り上げ、その認識を考察した。結果、「学生の指導者」「教育界の機関紙」として期待された『晨报』は、学生運動の発展に伴い、学生と政治の関係に対する認識を変化させていったことが明らかとなった。五四運動初期には学生運動を支持する態度を示していたが、20年代初期からは学生運動に疑問を持つようになり、20年代後期には教育機関の立場から、学生運動への不支持を表明し、学生は学問に集中すべきと主張するようにならなってきた。先行研究では、『晨报』の学生運動に対する認識は「支持」か「不支持」か、二者択一的に考察されてきたが、実のところ「支持」から「不支持」への変遷があったのである。

本稿では『晨报』の一側面——『晨报』の紙面上での学生運動に対する評価の変遷を指摘したに過ぎず、本論で検討できなかった課題は極めて多い。言論に変化が生じた原因などを十分に論じるためには、『晨报』の編集方針に関する分析や、『晨报』と党派の関係など、より多くの論点にわたって考察を行わなければならないだろう。こうした作業を今後の課題としたい。

## 注

- 1 王潤沢『北洋政府時期的新聞業及其現代化』（中国人民大学出版社、2010年）249頁参照
- 2 拙稿「日刊紙『晨报』の性格について—民国メディア史研究の基礎作業として—」（国際文化研究第22号、2015年）
- 3 「日本駐華公使緊急公文致外交部」『益世報』天津、1919年5月24日
- 4 外務省「新聞雑誌二閲スル調査雑件 新聞及通信二閲スル定期調査 支那ノ部 一」（国立公文書館アジア歴史資料センター、B03040879900）
- 5 他の史料としては、1923年における北京大学の学生に対する調査では、『晨报』が最も高く評価されたと記載されている。王潤沢『北洋政府時期的新聞業及其現代化』（中国人民大学出版社、2010年）82頁参照。なお、20年代から『大公報』に勤めた徐鑄成は、「私が師範大学に入った1927年の時点では北京の新聞の中で『晨报』が最も発行部数が多く、発行範囲が広い新聞であった。朝の師範大学の閲覧室で皆先を争って『晨报』を読んでいた。」と回想している。徐鑄成『報海旧聞』（上海人民出版社、1981年）52頁参照

- 6 原正人『近代中国の知識人とメディア、権力—研究系の行動と思想、1912-1929』（研文出版、2012年）
- 7 研究系：原点は清末の立憲派にある。中華民国成立後、政党政治に参加するため、立憲派が進歩党に改組した。後進歩党が憲法討論会と憲法研究同志会の二つの派閥に分裂したが、その合併により1916年、「憲法研究会」と称することとなった。「研究系」という名称の直接の由来はこの「憲法研究会」のことであり、「系」は当時の政治党派を指す用語である。
- 8 『晨报』を言及した研究系の研究として、彭鵬『研究系與五四時期新文化運動—以1920年前後為中心』（中山大学出版社、2003年）、張永『民国初年的進歩党與議會政党政治』（北京大学出版社、2008年）、原正人『近代中国の知識人とメディア、権力—研究系の行動と思想、1912-1929』（研文出版、2012年）、張朋園『中国民主政治的困境1909-1949晚清以来歴屆議會選舉述論』（上海三聯書店、2013年）、張朋園『立憲派與辛亥革命』（上海三聯書店、2013年）などが挙げられる。
- 9 邵建『胡適前伝』（秀威出版社、2008年）225頁参照
- 10 『晨报』人物に関する研究については、西川正夫「四川省廣安縣備忘録：清末民國初期の郷紳」（『金沢大学文学部論集 史学科篇』第15号、1995年3月）、後藤延子「李大釗資料拾遺、並びに覚書（続）」（『人文科学論集 人間情報科学編』第30号、1996年2月）、邵建『胡適前伝』（秀威出版社、2008年）、劉廣定『愛國正義—律師：劉崇佑先生』（秀威出版社、2012年）、郝景泉「湯化龍与清末民初政治」（南開大学博士学位論文、2012年）などがある。
- 11 例えば、曾虛白『中國新聞史』（國立政治大學新聞研究所、1969年）、高郁雅『北方報紙輿論對北伐之反應：以天津大公報、北京晨報為代表的探討』（台湾学生書局、1999年）、趙建国『分解与重構：清季民初的報界团体』（近代中国的知識與制度轉型叢書、生活・讀書新知三聯書店、2008年）、王潤沢『北洋政府時期的新聞業及其現代化』（中国人民大学出版社、2010年）等が挙げられる。
- 12 呂芳上『從学生運動到運動学生—民国八年至十八年』（中央研究院近代史研究所、1994年）、他に翟作君、蔣志彦『中国学生運動史』（學林出版社、1996年）が挙げられる。
- 13 前掲呂芳上『從学生運動到運動学生—民国八年至十八年』
- 14 同前169頁参照、原文「对学生的政治运动也不具好感。」
- 15 『晨报』1920年4月25日、原文「报名简章可见每星期一北京晨报, 星期日上海时事新报, 星期一上海申报。」
- 16 『晨报』1924年5月4日、原文「日本京随报附送新明剧场传单一张请向送报人索阅, 男女学生有制服徽章者本日会场一律半价。」
- 17 『晨报』1924年9月27日、原文「平安电影公司 学界注意 每星期六星期日下午三点加演日场优待学生, 每位五角以制服徽章为限。」
- 18 『晨报』1927年4月24日、原文「东长安街平安剧院, 今日映演之印度电影, 在科学及艺术上, 均有相当之价值, ……为引起北京教育界注意电影教育起见, ……专为教育界映演一次。票价仅收二角, 俾多数学生, 共得享受优待。时间业商定今日上午十一点开映, 并以通知各校, 请届时前往矣。」
- 19 『晨报』1926年1月19日、原文「学生诸君凡有志升入国内大学或转入国外大学者不能不预先筹备数年学资, ……存储一年之费可备三年之用实为预备学资最节省之法。」
- 20 『晨报』1927年10月7日原文「各省旅京学院注意 后者本馆对于学校按时所需像片研究纯熟精术制美迅速完成。各校考试之期用像最急 弊馆已备妥善以待学员赐顾特别速成决无延误故先声明。」
- 21 「本社对京内学界特別啓事」『晨报』1922年4月26日
- 22 王潤沢『北洋政府時期的新聞業及其現代化』（中国人民大学出版社、2010年）82頁参照
- 23 前掲徐鑄成『報海旧聞』52頁参照、原文「我进师大时（1927年）、《晨报》还是北京各报中规模最大, 发行最广的报纸…在阅览室里, 早晨大家还首先抢看《晨报》。」
- 24 「讀書運動号」『晨报』1922年9月17日
- 25 「三周年記念刊」『晨报』1921年12月1日

- 26 筆者の統計によると、五四運動発生した5月だけで、学生運動に関するニュース・社説は57点に達し、中では女子学生の態度、留学生の反応、地方学生の電報など各方面から学生の活動を報道した。
- 27 「良心」『晨報』1919年5月20日、原文「想替政府做个后援,为国家争些体面,这本来是一般国民应有的义务。不过我国的国民。除了学生之外。几几再没有说话的人。」
- 28 同前、原文「尽日东奔西走,不肯放松的人,就剩下这一班青年学生罢了。」
- 29 「再论学生事件和国家法律问题」『晨報』1919年5月14日
- 30 白永瑞著、孫安石訳「中国現代史上の民主主義再考:1920年代国民會議運動」(『中国研究月報』第57卷第3号、2003年3月)
- 31 同前
- 32 「敬告北京学生」『晨報』1920年4月22日、原文「学生精神固然很可敬,而行动未免有点欠斟酌了。……是罢罢课底结果,可以不可以得到学生所希望底条件,我们是在疑问。」
- 33 「三周年記念刊」『晨報』1921年12月1日
- 34 「我们对于学生的希望」『晨報』1920年5月4日、原文「教育界的风潮似乎没有一个月平静的」
- 35 前掲邵建『胡適前伝』225頁参照
- 36 杉本史子「新文化運動後期における女子学校の「学潮」と女学生:『民國日報』とその副刊の報道を中心として」(『立命館文学』第619巻、2010年12月)
- 37 「国民党与共産派」『晨報』1925年1月16日
- 38 胡适著、曹伯言編『教育』(中華書局、1998年)
- 39 小林善文『中国近代教育の普及と改革に関する研究』(汲古書院、2002年)170頁参照
- 40 「北大二十教授声明書」『晨報』1925年9月22日
- 41 前掲呂芳上『從学生運動到運動学生—民国八年至十八年』242頁参照
- 42 中國社會科學院近代史研究所中華民國史研究室編『胡適來往書信選』(中華書局、1979年)335頁、原文「你以为《晨报》不该烧吗?」
- 43 「今日的学風」『晨報』1928年4月9日、原文「我们以为这件事情的发生,似乎已明白表演出中国今日学校的风纪,已明白指示出中国今日教育的悲运。」
- 44 同前
- 45 「如何充实大学教育」『晨報』1928年4月13日、「学生演劇之下流化」『晨報』1928年4月19日
- 46 「今日的学風」『晨報』1928年4月11日

